

〇堀口 逸子<sup>ほりぐち いっこ</sup>、西方 寿和<sup>せいほう しゅうわ</sup>、中村 清徳<sup>なかつむら せいとく</sup>、松岡 奈保子<sup>まつおか なおほこ</sup>、中村 譲治<sup>なかつむら じょうじ</sup>、  
 筒井 昭仁<sup>つみい しょうに</sup> (＊福岡予防歯科研究会、\*\*福岡歯科大学予防歯科学教室)

### はじめに

わが国において歯周病は30歳代から罹患者が増加し、重症化がみられ、40歳代後半以降では歯の喪失の主たる原因となっている。よって中高年期における歯及び口腔の健康管理は重要となる。しかし中高年層をかかえる企業における産業歯科保健への取り組みは今だ少なく、あっても疾病を検出する検診事業が主であり、予防や教育プログラムの実践例はあまりみられない。歯周疾患の予防には日常のセルフケアを基盤に定期的なプロフェッショナルケアを行うことが望ましいとされている。勤労者のセルフケア能力を高めるためには個人の気づきをベースとした健康学習や、勤労者をとりまく環境の整備を行う等のヘルスプロモーション的アプローチが有用と考えられる。

### 目的

地域や企業における保健政策の策定やプロセス評価に有効な健康教育モデルとして高く評価されている「プリシード/プロシードモデル」を利用した質問紙を開発し、歯科保健にかかわるQOLの状況や歯周疾患の有病状況、セルフケアを中心とする保健行動とそれに関わる準備、強化、実現因子などの情報を得るため質問紙調査を実施した。目的はプリシード部分のフェイズの1から4までについて歯周疾患に関わる診断を行うことである。

### 方法

この研究では「プリシード/プロシードモデル」の各フェイズに対応させて36の質問項目からなる質問紙を作成した。1996年9月、福岡市に本社をおく製造業の企業（従業員約800人）の本社勤務者170名を対象として質問紙調査を実施し、総合的な診断を行った。

### 結果

有効回答率は86.5%（男128名、女19名）で、平均年齢は38（SD=12.2）歳であった。結果を「プリシード/プロシードモデル」にそって質問項目を配置し図1に示した。「QOL」では53%が歯に関連して困りごとをもっていた。また会社にとっても歯が原因の欠勤・早退などの不利益がみられた。歯周疾患の有病状況を示す「健康」では83%が何らかの自覚症状を持っていた。次に「保健行動」をみると、歯周病の好発部位である歯間部を清掃する歯間ブラシやフロス（糸ようじ）をときどきを含めて利用する者は33%、社内で歯磨きをしている者は18%であった。しかし「準備因子」で自分の努力で歯周病が防げると思っている者は68%であった。そしてまた「実現因子」をみると、セルフケアの方法を知っていると答えた者はわずかに23%で、技能の不足がみられた。定期健診受診という「保健行動」を行う者は15%にとどまっていたが、「準備因子」をみると86%の人が定期健診で予防可能であると思っていた。また行動後に得られる報酬や気持ちよさなど「強化因子」をみると、定期健診時行われる歯科医院での歯石除去を76%がしており、保健指導をうけた者は39%であった。そしてその感想では約40%がよかったと答えていた。また施設の利用しやすさ、環境の整備の面で「実現因子」をみると、勤務時間中の治療について職場の理解があると答えた者は18%、治療に行くことに気兼ねがあると答えた者は42%であった。最後に口腔の健康教室の開催、参加に関する質問では73%が希望していた。

### 結論

質問紙調査からプリシード部分における各診断を行った。

- 1.現在、歯が原因で社員に困りごとが存在し、会社にとっても不利益がみられた。
- 2.何らかの歯周病の自覚症状をもつ者が80%を超えていた。

